2012／春

季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

■目次

越前和紙への提言　赤瀬浩成さん……1頁
ショップレポート　かみ添……2頁
イベントレポート　越前和紙を愛する会シンポジウム……3頁
情報欄　イベント情報、お知らせ……4頁

―越前和紙への提言―

■赤瀬 浩成（あかせ ひろしげ）
1964年岡山県笹岡市生まれ。メイド・イン・ジャパン・プロジェクト代表取締役。1991年、家業の株式会社アカセ木工に入社し、家具製造・卸業、システム家具製造、特注家具製造、小売部門立ち上げなどに従事する。同社代表取締役、代表取締役会長を経て、2005年、メイド・イン・ジャパン・プロジェクト株式会社を設立。日本のモノづくりの継承と産地活性化の可能性を流通側から引き出す取組を推進。2009年、日本のモノづくりの伝統や文化を学び、その真の価値を伝える人材育成のため、ニッポン・ブランド・マイスター講座を立ち上げる。東京六本木のミッドタウンにフラッグ・ショップ「THE COVER NIPPON」を運営。
URL: http://www.nipponbrand.org/

赤瀬浩成さん（日本のものづくりプロデューサー）
「産地の十年後を本気で見据えて！」

●日本のモノを売り直す

私は父が創業した岡山県の婚礼ダンスを作っている会社の二代目に生まれました。大学卒業後、ニューヨークや東京で暮らしていましたが、二十六才で郷里に戻り、そこからモノづくりに携わりましたが、地場産業がどんどん疲弊していくのを目の当たりに見ています。いいものを作れば売れるという時代を経験している人達は、必要とされるモノより自分たちが作りたいモノを作るということに執着がある。家業の家具屋も婚礼ダンスでは生き残れないので、業種業態も抜本的に改革し、現在はニーズに合わせたトータル家具とショップの経営も行っています。四十才の時、家業の方は弟に任せ、モノは作れるけれど、必要とされるモノづくりや売る意識が希薄で、売り方を知らない人達のために、自分の経験が何かお役に立てないかと思い、設立したのが「メイド・イン・ジャパン・プロジェクト」（従業員十一名）です。同じ名前の株式会社と NPO があり、業務的には NPO は現在愛知と滋賀に支部がありますが、将来的には全国に活動拠点やネットワークを構築して行く役割。会社の方は産地のメーカーさんを強くするために「売る・伝える・企画する」仕事を行います。目的はどちらも十年後のモノづくりのために産地の活性化を促し、日本のモノをもう一回ちゃんと売り直そうというものです。

五年前、東京ミッドタウンの中に売ることに力を注いだ店舗を出しました。プライスと POP 表示は出来るだけお客様に見えないようにするのが、通常のお店と違うところです。今の人達は、ぱっとみてこれがいいものがどうかわからない。マークや POP に頼ってしまっていて、本当に自分の好きなものも分からなくなってしまっている。勿論情報がないとモノを買わないという理屈は分かりますが、いいものを見極める目や感性がどんどん鈍っています。それをもう一度売り場の中で、お客様の目利きを重要視したようなお店にしたいというのが狙いです。自分たちで預かったものは責任持って売るということを六名のスタッフには徹底はしていますし、彼らも販売の専門家として自主的に勉強しています。ものの知識のない方には、このモノがどういう経緯・背景で作られ、歴史の話など少なくとも全員が出来ます。

折しも備前焼の特集が開催されていた

東京六本木、ミッドタウン内のショップ「The Cover Nippon」

●ニッポン・ブランド・マイスター講座

店舗だけでは伝わらない目利き教育を、きちんとしたカリキュラムで推進していこうと「ニッポン・ブランド・マイスター講座」を二年前に立ち上げ、今年で第七期を迎えます。本科の講座料は、月一回二時間全八講座で十三万五千円と通常のカルチャーセンターなどに比べると少し高いかもしれませんが、その分「本気」を感じ取って頂けるのではと思います。授業は「うつわ、和紙、漆、日本茶、日本の色、染色、デザイン、これからのモノづくり」のテーマで一流講師陣が講義し、他にも、現地にいって学ぶ産業観光型講座、一般の人も参加できる公開講座や「モノづくり塾」という特別講座も用意されています。座学と実技の両面から学ぶ工夫をしています。

受講生は三十代後半～四十代前半が多く、男女比は半々です。内訳はモノづくり関係のメーカー、クリエーターやデザイナーの方が二十五%、マスコミ、コーディネーター関係が二十五%、外資系・銀行・商社などの一般の方が五十%。

我々が望むことは、学んだことを「知ってよかった」だけでなく、自分の家族や同僚、仕事を通して日本の伝統的なモノづくりや産地の知識を皆さんがスピーカーになって情報発信をして、それぞれがアクションを起こして欲し

い。そうすることによって地域のモノづくりが次のステージに行くことが目的です。

●総体としての残してこそ「産地」

この十年で何か手を打たない限り、どの産地も問屋さんの機能不全など、多くの問題を抱えています。又、同じモノを何十年も作ってきた人が売ることを考えるというのも無理な面があります。逆にそうでない人達が職人と一緒になって、価値を高める動きを作っていかないといけません。産地というのは一社だけで成り立っているのではなく、いろんな人達が集まって、流通システムまで含む優位な拠点を長い年月かけて作り上げているのです。ですから、いわば総体として、あるいは環境として残してこそ産地の魅力が活かされるのです。今、ゼロから産地を作ろうとしても出来ませんよ。もう一回、十年後に自分たちはどうやって食っていくか、他人を当てにしないで折に触れて真剣に考えるべきです。

作り手みんながダメだ、ダメだと閉塞感を持ってしまっているのが一番いけません。でないと、今、日本のDNAを持っているモノづくりを見つめ直したいと願っている買い手にも、買いたいという意識がなかなか芽生えてこないですよね。

ジャパン・ブランド・マイスター講座、和紙授業風景

ショップレポート

■「かみ添」
特注オリジナル唐紙の店（京都）

京都市北区紫野界隈。最近、京都通の若者にもちょっとした人気の鞍馬口通りに面して「かみ添」はある。通りには、売り切れご免の京わらび餅店「茶洛」、そばの名店「かね井」、行列の出来る喫茶店「さらさ」（元銭湯）、外国人も多い銭湯「船岡温泉」（登録有形文化財）、長屋を改装した「スガマチ食堂」、ライブもやる昔ながらの喫茶店「ガロ」など、個性的な店が点在している。また近くには、千利休縁の寺、大徳寺や京都固有の植生が残る緑多い船岡山公園もあり、ブラブラ歩きには楽しいレトロなエリアだ。

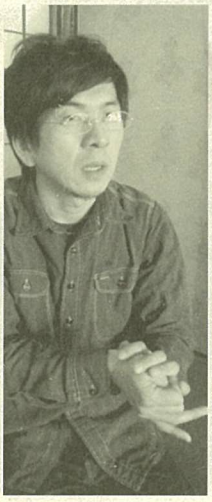
元理髪店という町家を活かした店舗

「かみ添」の店舗は古い理髪店を改装したもので、隅にはタイルの流しや漆喰壁にしつらえた出窓の待合腰掛けも残し、趣のある雰囲気を醸し出している。

店主の嘉戸浩（かど こう）さんにお話を伺う。

●京都でしかできない仕事を求めて

嘉戸さんは、京都の美術大学のプロダクトデザイン出身。学部途中でサンフランシスコ私立アカデミー総合芸術大学のグラフィックデザイン科に編入し、卒業後、ニューヨークのデザイン事務所で働く。西洋のデザインに憧れて渡ったアメリカだったが、口々に日本のデザインのすばらしさを唱える回りのデザイナーに逆に感化され、「京都でしかできない仕事」を求めて、帰国後の二〇〇三年、四百年の歴史を持つ京唐紙の老舗に入った。五年間の修行後、二〇〇九年独立、ショップ兼工房をオープン。紙を扱っている店だと分かるように「言葉を添える、色を添える、気持ちを添える、季節を添える…」の思いを込め、「かみ添」と名付けた。


店主の嘉戸浩さん

唐紙は漢字の如く、元々中国の紙。日本の紙を使い、日本の文様を考えていく中で、日本独自の技術が出来上がった。唐紙＝襖紙と思われているが、初期の用途は文字を書くための料紙だった。版木の凸の柄に絵の具を載せ、上から和紙を置いて手で摺る。版木・紙・絵の具の組合せの調整を考えながら、美しく摺り上げる技術を体得するのが難しいそうだ。

同じ版木でも、ベタ面の多い版木（日向）と線画の版木（影）では、絵の具の作り方が全く違う。絵の具もキラ、胡粉、色物を作るのかで違い、紙も厚さやドーサの具合が違う。同じ柄ばかりを摺ることはまずなく、毎回初めてみたいなものだという。複数枚摺るので同じ出来映えにするのが難しい。紙は主に越前の鳥の子紙を使う。手漉き故に同じ品番でも紙の厚さが違う時もあるが、試し摺りをして作業をむしろ紙に合わせる。「紙漉さんも同じ職人同志で気持ちが分かるので、むげに返品することはしたくない」という。

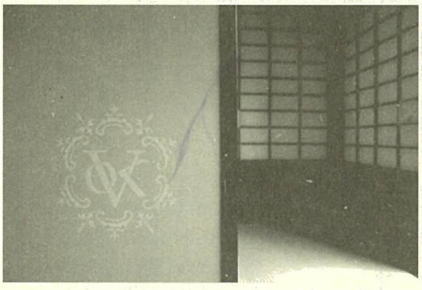
●特注オリジナル唐紙

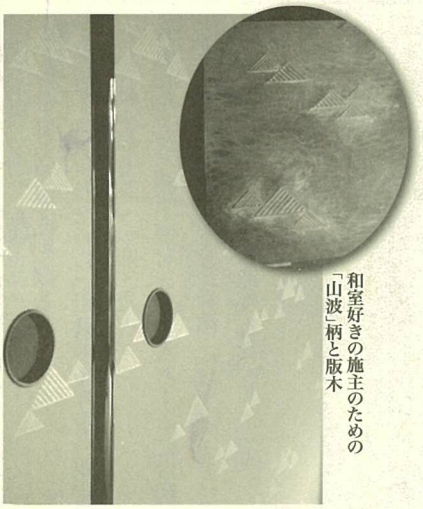
「かみ添」の主な仕事は特注のオリジナル唐紙制作だ。お客は、近くの大徳寺に立ち寄った茶道関係者、神社仏閣、お茶屋さん、日本料理店、日本旅館、アーティスト、やっと和室を楽しめる余裕できたという一般の人など、和の本物を求める人達だ。古典柄を下敷きにしていても、そのまんまの古典柄はやらないことにしている。

「古典柄は永い歴史の詰まった素晴らしい柄ですが、模様が型として完成されているので、同じ模様を継承することに意味があります。僕は古典柄をやるとしても、自分なりの今の線を描きたい。お客さんと直接話をすることで、共に考える喜びもあります。」

オリジナルの唐紙柄は、こうして客の思い入れや注文に合わせて新規提案されたり、アレンジされる。紙合わせの扱いや絵の具も、従来とは違う新しい発想で、喜ばれているそうだ。

「妙心寺の春光院は南蛮寺として知られていて、お茶会をするためにだけに襖を入れ替えたいといわれたので『南蛮』をテーマに考えました。南蛮貿易を行っていた東インド会社のロゴを文様にあしらい、江戸初期の張り方の十二枚張りで、


妙心寺・春光院のオリジナル柄



和室好きの施主のための「山波」柄と版木

胡粉とキラで化粧しました。アルファベットの紋章も以外に襖に合って、面白いと言って下さいました。」

● 京都の職人モデルケース

「一般の方にとって、唐紙との最初の出会いはかなり重要なことだと思っています。素敵な空間で手に取るのと、雑然とした空間で出会うのとでは、同じものでも心に残る印象が随分違います。僕は自分の作ったものをしっかりお客さんにプレゼンテーションしたいという思いが強くあったので、きちんとした事業計画を作り、店舗兼工房に向くいい場を作りたかった。」

職人はモノを作れて当たり前。自分の仕事が理解され続けていくにも、この世界にも経営センスが必要だ。

「唐紙は伝統産業と捉えられがちですが、実はグラフィックデザイン、インテリアデザインでもあり、テキスタイルデザインにも繋がる。この可能性の上に仕事をしたいと考えていて、新しい分野にもどんどん挑戦したい。」

伝統工芸の職人は京都の財産。これからの職人ビジネスや持続可能型産業としてもモデルケースとなりそうだ。

イベントレポート

「越前和紙を愛する会」創立四十周年記念シンポジウム
―生活文化の中の和紙の「用」を考える

昭和四十六年、「文化のふる里づくり」事業に端を発し、越前和紙の歴史の発掘、継承、和紙文化財の研究、情報発信などを目的に創立された「越前和紙を愛する会」は、本年度で四十周年を迎え、三月二十五日、記念シンポジウムを開催した。

日本の暮しのあらゆる「場」で使われてきた和紙は、戦後は特に格安競争の波に巻き込まれ、全国各地にあった手漉きの里がつぎつぎと失われつつある。しかし、近年の和柄や和のインテリアブームにも見られるように、消費者も漸く和紙のすばらしさに気づき始め、関心が高まっている。にもかかわらず、その動きはなかなか売上に繋がらない。

シンポジウムでは、この様な問題意識の元、四人のパネリストを迎え（司会：本誌、右衛門佐）、和紙の魅力を改めて再確認・共有し、和紙と人とのかかわりを深め、暮しの中の和紙の新たな「用」を考える方策を話し合った。

● 伝えたい和紙の魅力様々

杉原氏は江戸時代から続く産地問屋「杉原商店」の社長。デザイナーとの出会いを機に、十年前からインテリア関係のフェアに和紙を出展するようになった。地元の漉き場と組んだ大判のオリジナル和紙が注目を浴び、国内を始め、フランス、ドイツ、イタリアなどの国際見本市では、和紙を知らない西洋人にも、美的素材としての和紙の可能性を伝えている。和紙の様々な相談に乗る相談システムが確立できれば、まだまだ和紙の需要は喚起できるという。

日本橋高島屋 エントランスディスプレイ十月―杉原商店提供

岩野順市氏は、伝統の越前生漉き奉書を継承する人間国宝、岩野市兵衛氏の長男。質のいい国産原料を使うここの紙は木版画用紙として定評があり、需要は減少していない。作品の出来映えを左右するプロユースの紙だけに、常に最上の紙を作り続けることが大切だが、現在の大きな不安要素は材料の調達だ。和紙の良し悪しは口では伝えにくく、使ってこそ分かるものなので、使う取組や仕掛けを持続的に考える必要があると順市氏は言う。

奉書を漉く岩野順市氏

越前和紙青年部会長の山路勝海氏は機械漉き大判高級和紙メーカー「山路製紙所」の社長でもある。紙漉きの若手後継者で構成される青年部は、ひっかけ、落水、流し込み、漉き合わせなどの越前に伝わる様々な技法を、カレンダー作りを通して習得・継承していく活動を行っている。近年、和紙組合のイベントへの積極参加、商品開発、各種の見学会・勉強会、産地外との関わりを通じて、消費者の動きを肌で感じとり、ヒントとなる情報を得ようとしている。氏は、和紙の最大の魅力は素材が醸し出す触感、風合い、立体感であり、それが癒し効果や高級感に繋がっていると語る。和紙ファンを増やすには、とにかく触れる機会を増やすことにあるのでは、と意見を述べた。

青年部カレンダー作り

岡本小学校の和紙体験学習

久野賢一氏が校長を務める越前市岡本小学校では、一～六年生まで、楮の栽培、皮剥、お面の立体漉き、葉書作り、絵漉き、流し漉きと溜め漉き学習、卒業証書作りなど和紙の一貫体験学習が行われている。紙漉きウィークもあり、PTAで組織する「和紙クラブ」や和紙職人、組合などが、地域ぐるみで子供達の和紙教育を支えている。学校が「本物教育」に果たす役割は大きく、和紙は文化や情緒の面でも、又次世代のファンを育てる意味でも、岡本小学校の取組を参考にして欲しいと氏は語る。

●分野別戦略への道筋

世の中には「和紙が好き」と言う人は実に多い。

しかし「使い方がわからない、買うところがわからない、和紙がよくわからない」と言われるのも事実。情報提供・発信不足やそれを改善・促進するための生活提案や、市場戦略の不在など様々な原因が挙げられている。

シンポジウム後半では、和紙の大まかなニーズを、アート、趣味、インテリア・建築、生活の彩り、既存の小間紙製品、の分野に分け、具体的にイメージしながら、各々の戦略について考えてみた。ヒントとして出てきたのは以下のようなことである。

- プロ向けの相談窓口の設置、アーティスト向け制作サポート・システム（宿泊、材料、技術支援体制、料金など）、作品・作家紹介等の情報発信
- センスのいい高級和紙専門ブティックですてきな和紙生活を発信
- 和紙のソムリエ、コーディネーター、買い物アドヴァイザー、文化指導者、などの育成
- 本物の教育効果を訴え、学校への和紙無料配布、必須プログラムに入れる
- 各分野のキーマンから切り込む（学校の美術教師、建築家、手作りサイトなど）
- 自前ですべて行おうとせず、ＮＰＯや他団体と積極的タイアップ
- 従来なかったコスメティック、ファッションなどの分野の可能性を探る
- 手作りファンのための「和紙手作り市」開催、「和紙手作りネット」　など

会場の今立生涯学習センター大ホールには約五十名の参加者が集まり、中にはアイデアを熱心に書き留める姿も見られた。

※なお、シンポジウムの詳細は越前和紙を愛する会発行の「和紙の里」三十三号に掲載予定です。

和紙ミニコーナー

■越前和紙商品「ギフトショー」に出展

日本最大のパーソナルギフトと生活雑貨の国際見本市『第七十三回東京インターナショナル・ギフト・ショー春２０１２』が、二月八日～十日、東京ビッグサイトで開催され、越前和紙商品が初めて出品された。

この取組は、越前市などが地元の伝統産業を中心に商品開発や販路拡大を支援する事業の一環。伝統的技術や和素材を現代の生活スタイルに合わせた商品を展示する「伝統とＭＯＤＥＲＮの日本ブランド」ゾーンに「越前ものがたり」と銘打ったブースを設けた。越前和紙からは紙和匠、小畑製紙所、信洋舎製紙所、やなせ和紙、山田兄弟製紙、えちぜん和思工房、丸茂製紙、杉原商店、五十嵐製紙、滝製紙所、山次製紙所の十一社が参加。集客力のあるこのフェアで売り方のヒントを探ろうと各社、バイヤーの話に熱心に耳を傾けた。越前市産業政策課の担当者は「紙屋さんは作った紙が、どんな商品になるのか知らない人が多かったが、皆さんやっと自分の所でも商品を作り、パッケージからカタログまで細部に至る商品としての完成度も考えるようになり、レベルもだいぶ上がってきた」と話していた。

東京ギフトショー「越前ものがたり」ブース

情報欄

●イベント情報

■紙祖神　岡太神社・大瀧神社春季祭礼
時：2012年5月3日（木・祝）～5日（土・祝）
場所：岡太神社・大瀧神社（越前市大滝町）

■神と紙のまつり・大掘り出し市
時：2012年5月3日（木・祝）～5日（土・祝）午前9時～午後4時
場所：和紙の里通り（越前市新在家町）和紙の特設テント
和紙はかり売り、・バザーなど

■第41回金沢ペーパーショー
時：6月8日(金)～10日(日)午前9時～午後5時
場所：石川県産業展示館　3号館
越前和紙展示、即売、体験、実演あり

●映画「ＨＥＳＯＭＯＲＩ」東京、大阪、名古屋で公開決定！

福井県で先行公開されていた越前の和紙の里を舞台にしたファンタジー映画「ヘソモリ」が、東京、大阪、名古屋でも公開されることになりました。また、福井でも再上映されます。スケジュールは以下の通り。

5月26日(土)～6月8 日(金)モーニングショー
【東京】シネ・リーブル池袋
【大阪】シネ・リーブル梅田

5月26日(土)～6月8 日(金)限定上映
【名古屋】中川コロナシネマワールド
【福井】福井コロナシネマワールド
【金沢】金沢コロナシネマワールド
【岐阜】大垣コロナシネマワールド

詳細情報：http://hesomori.net/categoryFS.html

編集後記
西洋の伝統工芸品は概して、かつて王侯貴族が使っていたとか、金を使っているとか、細工やデザインが凝っているという具合に、その品物が何故高いかが視覚的にもわかりやすい。日本のものは、手間暇惜しまぬ職人技、簡素美、素材美、象徴的なデザイン美学があり、何故高いのかを説明するのは難しい。和紙はその最たるモノとも言えるだろう。しかしその美しさはみんなが理解できる。（よ）

季刊・和紙だより 第34号（2012年春号）　発行日：2012年4月16日　和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人：福井県和紙工業協同組合　山田益弘　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所：Office YOMOSA　〒606-8225　京都市左京区田中門前町90　TEL: 075-712-8834　FAX: 075-702-6223　E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp
編集人：右衛門佐美佐子・田中裕子
※無断での転写・転載はお断りします。